

(その5)「唐人屋敷」界限

●7月30日(土)から79日間にわたって開催された「長崎さるく博'06」のプレイベントは、10月16日(日)に盛会のうちに終了し、いよいよ来年4月から開催される“市民がつくるまち歩き博覧会”の本イベントに向けて、まずは順調なスタートを切ったように思われる。

今回の「誌上さるく」では、今なお“唐人街”の香りが色濃く残る「唐人屋敷」界限と少し足をのばして唐寺周辺を中国との交流の歴史、当時の人々の暮らしぶりなどに思いを馳せながらさるいてみたいと思う。

<唐船と長崎との出会い>



「唐船図」(長崎版画)
長崎大学付属図書館経済学部分館所蔵

唐船(中国船)の初の長崎来航は、西川如見の「長崎夜話草」によれば1562年のことで、その場所は港外の戸町浦(現在の深堀町付近)であったとされている。ちょうど、ポルトガル船が横瀬浦に来航した頃である。

当時の中国(明)は、表向きには日本への渡航を許していなかったといわれている。しかし唐船は、平戸、福江、口之津など西日本各地にしばしば姿を現しており、唐船の来航そのものは特別珍しいことではなかったらしい。長崎への来航も中国本土沿岸(現在の寧波や福州など)

から最寄りの寄港地を求めるうちに、船がかりのよい場所を探し当てたという程度のことに過ぎなかったようである。平戸領主松浦隆信をはじめ諸勢力が明との貿易に着目し多くの唐人たちを受け入れたことから、これらの地域では現在でも唐人町の面影を残している。

その後、1635年に唐船貿易が長崎1カ所に限られると、各地に散住していた中国人たちが長崎に集まって来るようになり、唐船の来航や唐人の居住も盛んになっていった。

<唐人屋敷の設立>

一方、中国との貿易の拡大によって生じた莫大な銀や金の流出に頭を痛めてい



唐人屋敷跡の石碑（籠町十字路）

た徳川幕府は、1685年に定高仕法^{じやうだかしほう}を施行し、1年間の貿易額を唐船は銀で6,000貫目（オランダ船は3,000貫目）に制限することにした。このため、中国船による密貿易^{とうせんぬけがい}（唐船抜買）が横行することになり、その対策として考え出されたのが、唐人の隔離政策、すなわち唐人屋敷の設立である。これまで市中の船宿^{ふなやど}などに雑居していた唐人たちをここに収容し、船載貨物を日本側で預かることで輸入貨物の出し入れを管理しようというものであった。

唐人屋敷は、唐館、華館とも呼ばれ、1688年、十善寺郷幕府御薬園の地（現在の館内町）に着工し、翌1689年に完成した。総坪数約9,400坪、東京ドームの5分の4、出島の2倍以上の広さであった。練堀で周囲を囲み、外側に水堀や空堀を、さらに外周に一定の空き地を確保し、竹垣で囲っていた。

入口には2つの門があり、外側の大門の脇には番所が設けられ、さぐり番と呼ばれた役人が無用の出入りを改めていた。ただし、出島のオランダ人が嚴重に監視されたのに比べ、中国人は比較的自由に出入りが許されていたという。

大門と二ノ門の間に乙名部屋^{おとな}、通事部屋^{ふだば}、札場、辻番小屋、牢屋などが置かれたほか、魚や野菜などの生活用品や伊万里焼などの輸出品の見本を並べた商店などもあったらしい。



江戸時代の唐人屋敷の様子（籠町十字路）

二ノ門内には、唐人部屋約20棟（2階建ての長屋）をはじめ、土神堂、媽祖堂（天后堂）、観音堂などが立ち並び、一度に約2,000人の中国人を収容できた。長崎に来航した唐人たちは厳重なチェックを受けた後、ほんの手回り品のみで入館させられ、帰帆の日までここで生活した。役人でもみだりに入れず、日本人で立ち入りを許されたのは「唐人行」と呼ばれた遊女だけであったといわれている。

安政の開国（1859年）後は廃屋化し、1870年の火災により焼失。その後、市民に分譲され、現在に至っている。

“長崎の中の中国”（現在も残る唐人屋敷跡の遺構）



◆土神堂（市指定史跡）

1691年に唐船の船頭たちの願いにより建立。1950年、老朽化に伴い解体され、1977年に長崎市によって復元された。

江戸時代、2月の土神祭には奉行所役人や通事も招かれて唐人踊りや楽曲が披露されていたといわれている。

◆天后堂（市指定史跡）

1736年、南京地方の人々が航海安全を祈願し、天后聖母（媽祖神）を祀ったのが起源といわれている。1906年に全国の華僑の寄付によって現在の建物が建てられた。

天后堂には関帝（三国志の関羽）も併祀されており、別名「関帝堂」とも呼ばれている。



★媽祖信仰（媽祖像）

媽祖は「菩薩」または「天后」とも呼ばれ、宋時代に中国福建省で発祥した民間信仰で、航海安全の守護神といわれている。

媽祖の両脇に、侍女、その前に千里眼、順風耳が控えている。かつて、悪事を働いていた千里眼、順風耳を退治、家来にしたという伝説による。



◆観音堂（市指定史跡）

瓢箪池の奥にある石の刻字（元文2年）があることから、1737年に建立されたものと考えられている。1917年、当地在住の中国商人・鄭永超によって改築された。

本堂には観世音菩薩と関帝が安置されている。

なお、入口のアーチの石門は唐人屋敷時代のものといわれている。

<唐通事と唐船風説書>

当時の鎖国体制下の日中貿易面や前述の唐人屋敷を中心とした唐人社会において、特に重要な役割を果たしたのが唐通事^{とうつうじ}であった。唐通事は世襲制で住宅唐人（長崎に在留した中国人）の出身であり、江戸時代を通じてその人数は800人を超えたという。1604年^{ほうろく}に馮六^{ほうろく}（馮六官）が任命されたのがその始まりとされている。

唐通事の職務には、大別すると通訳、貿易、外交の3つの職務があったといわれており、このうち、最も重要だと思われるのが外交事務である。外交事務には、風説の聴取をはじめ、^{しんぱい}信牌（貿易の許可書。長崎通商照票とも呼ばれた）の発給、さらには漂流邦人の身柄受取書の発行などもあった。

唐人から聴取した「唐船風説書^{とうせんふうせつがき}」も、オランダ人から聴取した「オランダ風説書」と同様に貴重な海外情報として扱われ、年番通事の責任のもとに作成された。そして、長崎奉行に2部提出され、その原本は、奉行によって江戸へ送られていたそうである。風説書は、幕府にとって外交、貿易政策の貴重な資料でもあった。

こうした外交関係の職務に加え、唐通事は、貿易および唐人の管理統制から、唐人の身の回りに関することなどまで、実に事細かく関与していた（この点、オランダ通詞のように単なる通訳とは違い、唐通事の場合「通詞」ではなく「通事」と書く）。



唐通事会所跡の石碑（興善町）

このように、“鎖国時代”にあって唐通事は、外交、貿易のみならず、唐人たちと直接交流をおこなうことによってはじめて入手可能となる文化、風俗などの“最新情報”の受・発信面においても重要な役割を果たすなど、“中国文化の移入者”でもあった。

＜唐寺と黄檗文化＞



崇福寺赤門（鍛冶屋町）

1620年頃の長崎では、当地に在住する中国人の数も増加し、自分たちがキリスト教徒ではないことの証明と航海安全を祈り媽祖堂の設置を目的に唐寺を創建するようになる。

そして、出身地ごとに興福寺（南京寺、1620年創建）、福濟寺（漳州寺、1628年創建）、崇福寺（福州寺、1629年創建）の唐三か寺（“三福寺”ともいう）を建立し、菩提寺とした。

また、彼らは高僧の日本への渡来を切望していた。こうしたなか、興福寺の3代住職逸然らによる再三の招請を受け、1654年に隠元が渡来。4代将軍家綱の命により黄檗山万福寺（宇治市）を開祖、日本に永住することになった。以後、わが国に渡来する唐僧は隠元の法系に限られ、渡来した唐僧は竺庵を最後に40人にも上ったといわれている。

隠元とその弟子たちによって、最新の黄檗文化、つまり南画や普茶料理、インゲン豆などに代表される南中国の文化が長崎の唐寺を通じて全国に広められることになった。その意味で、長崎は黄檗宗、黄檗文化の発祥地といえるだろう。

このほか、長崎では現在でも、多くの黄檗文化の影響を受けたものを見ることができる。興福寺、崇福寺などは中国様式の建造物であり、特に崇福寺の大雄宝殿、第一峰門は国宝に指定されている。また、興福寺の2代住職黙子によって1634年に架けられたとされている眼鏡橋（国指定重要文化財）は、わが国最初のアーチ式石橋として知られている。さらに、崇福寺などでは華僑の人々によって媽祖祭、中国盆などの中国の祭礼が行われていることやペーロンや精霊流し、くんちなどの年中行事にも中国文化の名残を見ることができることは周知のところであろう。

＜日中文化交流の場としての長崎＞

隠元の渡来以後、唐寺には僧侶、唐通事、貿易商人や唐船乗客のなかから文化人が数多く集まるようになり、いわば集会所のような役割を担う場所となった。同時に、日本人との交流を行う場所ともなり、日本各地からも文人墨客が集まるようになっていった。



館内から出島を望む（明治10～20年頃）
長崎大学附属図書館所蔵

そもそも、古来より中国文化の伝来は、日本側からの積極的な渡航によって自分のものにしてきたのであるが、江戸時代以降には、高い教養を持った人々が中国から日本を訪れるようになり、彼らに積極的に接触することで、強い影響を受けるようになった。そのきっかけとなったのが、唐寺の建立と隠元の渡来であったのではないだろうか。

1654年に隠元が渡来した際、随行の人々が30名もいたそうである。このなかには、僧侶のほか絵師など、様々な職種の人々が含まれていた。この時、日本国内からも宗派の違いを問わず、数十人もの仏教関係者が長崎に集まって来た。彼らは単に宗教人であっただけでなく、文人墨客として中国人たちに積極的な接触を試みたのではないかと推察される。こうして、彼らは中国からもたらされた書、絵画、画像などの黄檗文化を摂取することに努めたのである。

「長崎来舶中国文化人一覧」によれば、1619年～1925年の間に来崎した中国の文化人は90人を数える。1620年には興福寺の開祖真円^{しんえん}、1628年には福濟寺の開祖覚悔^{かくかい}、1629年には崇福寺の開祖超然^{ちやうねん}がそれぞれ渡来しており、1723年、前述の唐僧竺庵^{じくあん}（興福寺7代住職）を最後として、1725年以降は民間人の渡来のみとなり、職業も医師、儒学者、文人、船主や画家など多岐にわたっている。

日中文人の交友に関して、1804年、江戸時代後期に来崎した中国人画家江稼圃^{かうかほ}と蜀山人^{しよくさんじん}（大田南畝^{おおた なんぼ}）の話が残されている。江稼圃は1822年までに数回渡来した。幼少の頃から絵を好み、当時の南宋画の大家張宗蒼^{ちやうそうそう}を師とし、さらに李良^{きりよう}の門下に入って書と画を学んだという。この系統は中国文人画界の主流派であった。当時、蜀山人は、長崎奉行支配勘定方として江戸から長崎に赴任していたが、この

江稼圃と積極的な接触の機会を持った。蜀山人は、こうした中国の文人たちとの交流のなかで『和漢道詠道行』という文学作品を生み出したといわれている。このように、江戸時代後期の長崎には、わが国の文人墨客が中国からの文人らと直接、接触できる場所として数多く集まって来ていたのである。

●“鎖国時代”、唯一開港していた長崎において17世紀後半より幕末までに来崎した中国人たちの生活の場となった唐人屋敷。唐人屋敷があった館内町界隈には、現在でも江戸時代当時の道路、石垣、空堀等の歴史的遺構が多く残されており、



下町の雰囲気が残る坂段市場

隠れた魅力がいっぱいのコースであると思われる。

現在、長崎市では唐人屋敷跡の整備が計画されており、同地域の活性化さらに観光振興を図るための種々の取組みがなされているところと聞いている。

和蘭屋敷（出島）と並んで日本の対外貿易の2大拠点であり、わが国の近世における中国文化の窓口であった唐人屋敷が近い将来、当時の長崎の繁栄ぶりが偲ばれる貴重な遺産として鮮やかに蘇る日を楽しみにしている。

（石橋 隆幸）

参考文献 『中国文化と長崎県』 編集・発行 長崎県教育委員会
協力 長崎さるく博'06推進委員会事務局（長崎市観光部）